新富町文化財調査報告書　第 25 集

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書

祇園原古墳群 I

1998

新富町教育委員会

序

国指定史跡「新田原古墳群」は新富町の西部台地を中心に分布しています。

昭和19年には国の指定措置を受けていますが、近接する西都原古墳群の影に隠れその存在はあまり知らされていないのが実状です。

しかしながら古墳時代前期の西都原古墳群と古墳時代後期の新田原古墳群はそれぞれの時期を代表する県内で最も規模の大きい古墳群であり、日向地方全体の歴史を語るうえで非常に重要であります。

本町ではこの重要な古墳群を毀損から守り、歴史を学ぶ場として整備・活用する計画を立案しました。本年度の調査は整備に向けた遺構の確認調査で今後の復元等に必要とされるデータ収集にあります。

調査は来年度も継続を予定していますが、百足塚古墳の周溝からは九州では初見事例となる鹿形埴輪や人物埴輪の男根などが出土し、今後の調査成果が期待されます。

これらの調査成果を学術振興に資すると共に、これらをもとに整備活用を推進し、広く生涯学習の場で文化財の活用を図っていく予定です。

平成10年３月

新富町教育委員会
教育長　　清　　郁　　雄

例　　言

1．本書は平成９年度に宮崎県児湯郡新富町で実施された国指定史跡「新田原古墳群」の史跡整備にむけた確認調査の概要報告書である。

2．調査は文化庁の国庫補助事業「記念物保存修理・一般分」をもとに実施され、本書作成経費もそれによる。

3．調査の体制は次のとおりである。

○総　　括　清　　郁雄（新富町教育長）
　　図師　　勉（新富町社会教育課長）
　　高正　静夫（新富町社会教育課長補佐兼社会教育係長）
○庶　　務　山崎　和子（新富町社会教育課副主幹）
○調整・調査　有馬　義人（新富町社会教育課主事）
○指　　導　小田富士雄（福岡大学文学部教授・考古学専攻）
　　森本　幸裕（大阪府立大学農学部教授・緑地修景学専攻）
　　柳沢　一男（宮崎大学教育学部教授・考古学専攻）
○参加学生　藤本貴仁、松永幸寿、松尾茂樹、長友俊博
○作　業　員　滝口則雄、滝口恵美子、岩下ヨシ子、野尻富子、日野君代、杉尾美千子、新恵トシ子、大原一彦、日野仁美、小守容子、宝崎忠昌、吉野大、倉永喜、土屋信好、河野隆子、出井クニ、江口栄子、宮ケ中千穂

4．発掘調査は平成９年７月から９月、平成10年１月から３月まで行なった。

5．本書の執筆・編集は有馬が行なった。。

6．本書で使用される図面の実測・トレースは有馬、小守、長友、松永が行なった。

7．本書で使用する方位は第１～５図以外はすべて磁北である。

8．本書でいう「新田原古墳群」は国史跡の指定名称で、実際には古墳の集中する地区毎に別個の古墳群として把握でき、東から塚原、石船、山之坊、祇園原の各古墳群と呼んでいる。
　今回の整備・調査の対象は祇園原古墳群である。

9．調査関連資料および出土遺物はすべて新富町社会教育課が一括保管している。

本文目次

第1章　はじめに
第1節　調査の経緯と本報告の構成
1　調査の経緯 …… 1
2　本報告の構成 …… 1
第2節　新富町の概要
1　位置と現況 …… 1
2　地理的環境 …… 1
3　歴史的環境 …… 2
第2章　「新田原古墳群」の概要
第1節　日向地方の古墳分布 …… 7
第2節　一ッ瀬川流域の古墳分布 …… 8
第3節　「新田原古墳群」の概要
1　指定措置と周辺環境の変化 …… 8
2　既往の調査概要 …… 12
3　古墳群の分布と築造時期 …… 12
第3章　平成9年度の調査
第1節　祇園原古墳群の概要 …… 14
第2節　新田原59号墳の調査概要 …… 16
第3節　百足塚古墳の調査概要 …… 18
第4章　資料整理(1) …… 21
第5章　まとめ …… 35

図版目次

第1図　町内の主要遺跡位置図 …… 3・4
第2図　日向地方の古墳分布 …… 7
第3図　一ッ瀬川流域の古墳分布図 …… 9・10
第4図　祇園原古墳群古墳分布 …… 15
第5図　祇園原古墳群Aグループの古墳位置図 …… 16
第6図　新田原59号墳墳丘測量図 …… 17
第7図　百足塚古墳トレンチ配置図 …… 19
第8図　機織塚古墳墳丘測量図 …… 25
第9図　新田原52号墳墳丘測量図 …… 26
第10図　水神塚古墳墳丘測量図 …… 27
第11図　新田原65号墳墳丘測量図 …… 28
第12図　新田原67号墳墳丘測量図 …… 29

第13図　新田原68号墳墳丘測量図 ……30
第14図　弥吾郎塚古墳墳丘測量図 ……31・32
第15図　大久保塚古墳墳丘測量図 ……33・34

写真図版

図版１　新田原古墳群遠景（一ッ瀬川から台地面をみる） ……39
図版２　新田原古墳群遠景（弥吾郎塚古墳から古墳群を一望する） ……39
図版３　祇園原古墳群　平成元年頃 ……40
図版４　祇園原古墳群（南から）　平成９年 ……41
図版５　百足塚古墳　平成５年 ……42
図版６　百足塚古墳　平成９年（調査時） ……43
図版７　百足塚古墳 ……44
図版８　百足塚古墳　調査Ⅰ区 ……44
図版９　百足塚古墳　調査Ⅲ区 ……45
図版10　百足塚出土鹿形埴輪 ……45
図版11　百足塚出土人物埴輪 ……45
図版12　機織塚古墳 ……46
図版13　水神塚古墳 ……46
図版14　新田原52号墳 ……47
図版15　新田原65号墳 ……47
図版16　弥吾郎塚古墳 ……48
図版17　大久保塚古墳 ……48

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯と本報告の構成

１．調査の経緯

「新田原古墳群」は宮崎県の中央部を流れる一ッ瀬川流域にある。総数で207基の古墳が現存しているが、後述するように、実際は４つのグループに大別でき、それぞれ東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

古墳のほとんどは昭和19年に国指定史跡となり新富町の管理下にあるが、既に60年以上が経過し、その間の周辺環境の変化から、保存に憂慮すべき問題が生じつつある。そこで町では指定地の拡大と公有化を進め、平成７年度から史跡整備専門検討委員会を設置し、短期から長期にわたる約30年間の整備計画を立案した。

短期整備は公有化面積が広く古墳数も多い祇園原古墳群の特にＡグループを対象とし、５～６ヵ年間の発掘調査の後、大規模整備に着手する予定である。本年度は短期整備計画の初年度にあたり、古墳の内容を確認するのが目的である。

２．本報告の構成

本報告は以下の構成からなる。第１章第２節では古墳群の所在する新富町とその周知の遺跡の概要にふれ、第２章では広義の「新田原古墳群」の概要とそれに関連して日向地方全体と一ッ瀬川流域の古墳分布を紹介する。

第３章では平成９年度の調査概要を報告し、第４章でこれまでの調査で得られた祇園原古墳群Ａグループの前方後円墳データを整理する。

特に第４章は整備に向けた基礎資料の整理を目的としたもので、来年度以降も古墳群で検出された未報告の遺構や遺物を概要報告の中で随時まとめていきたい。

第２節　新富町の概要

１．位置と現況

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に面し、県庁所在地である宮崎市から約20km北に位置している。北西部から南東部にかけては一ッ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90ｍの台地面にかけて町域を有する。

隣接する市町村は西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町で、町域は南北約７km、東西約９kmで、総面積が約61km²である。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業であり、台地の中央部には自衛隊新田原基地があるため、「やさいと基地の町」というイメージが強い。

町の人口は平成８年４月現在で18,053人であるが、近年の道路交通網の整備にともない、宮崎市への通勤時間が短くなったことや、宮崎市周辺の不動産価格の高騰により、本町での宅地開発が活発となったため、人口も緩やかな増加傾向にある。

２．地理的環境

新富町が位置する宮崎平野は九州でも筑紫平野に次ぐ平野面積があり、なかでも台地が占める割合が高い。これら台地の形成は第４紀中期更新世初頭（70万年前）からの九州山地の隆起に始まり、氷

河期と間氷期の連続による気候の変化が、海水面の上昇・下降による土砂の堆積・侵食をよび、著しい段丘化が進行していった。

現在の段丘面は大きく11面に区分でき、古い順に椎原面、久木野面、茶臼原面、三財原面、新田原面、西都原面、豊原面、大淀面、国富面、三日月面、完新世段丘面と呼ばれる[1]。これらのうち新富町の台地面の大部分は三財原・新田原面に属し、標高70～90mの広大な平地が広がる。

沖積平野部に目を向けると、上記の段丘面が脆弱な部分から開析されて形成される急峻な谷の底部（日置川、鬼付女川流域）と、一ッ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の４～５の砂丘列に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。

３．歴史的環境（図１参照）

①　旧石器時代

遺跡の分布は新田原台地上が多く、後の縄文時代草創期の遺物を含む。発掘調査された遺跡は４箇所と少なく、いずれもアカホヤ層下から集石遺構にともなって遺物が出土した例が多い。

町内最古の例としては溜水遺跡で出土したナイフ形石器があり[2]、その他の遺跡では細石器が多い。町内では第２オレンジ層下の調査例がないため古い資料が少ない。

ところで、町内出土の細石器の多くは1980年代に大野寅夫氏によって本町大字新田字畦原を中心に表採・分類された「畦原型細石器」と呼ばれるもので、南九州を代表する標識資料となっている[3]。

②　縄文時代

これまで５つの遺跡で調査例があるが、検出された遺構の多くは集石遺構である。時期も旧石器から縄文草創期までが多く、前期以降の遺跡は少ない。

集石遺構は瀬戸口遺跡で確認された掘り込みをともなうものが大半で、押形文土器、隆起線文土器、貝殻条痕文土器などが出土している[4]。現在のところ集落や生活形態を復元できるまでの資料が少ない。最近の調査から祇園原地区遺跡や新田原201号墳周辺遺跡で孔列土器が検出され、後期の資料も徐々に採集されつつある。

③　弥生時代

前期の遺跡例に板付Ⅱ式併行期の壷が表採された今別府遺跡がある[5]。この遺跡と同様に前期から中期前葉までの集落は、日向灘に面した砂丘列上や台地端部、そして河岸低位段丘面に営まれた例が多い。日向地方の稲作開始期にあたるこの時期の水田経営は、河川流域にありながらも潅漑技術の未成熟さから谷地からの湧水を利用した小規模なものが予想される。

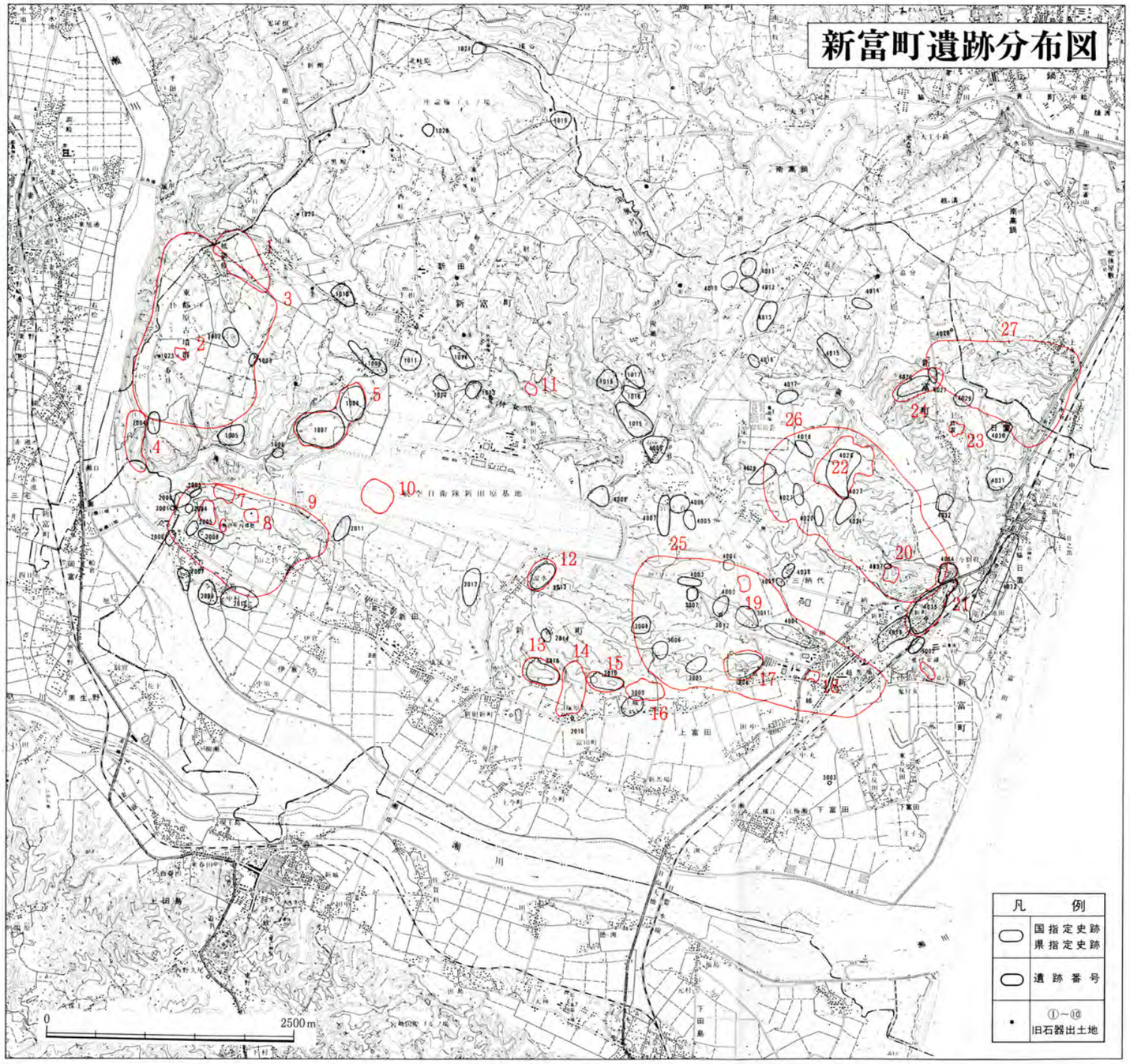
中期後葉から後期になると集落の立地が内陸化する傾向にある。新田原遺跡では竪穴住居12軒が谷地形を挟んだ微高地にあり、湯之宮遺跡などはさらに内陸に位置する。この時期の土器には瀬戸内地域との活発な交流を示す影響が認められ、その一方で在地的な花弁状住居が出現する時期でもある[6]。

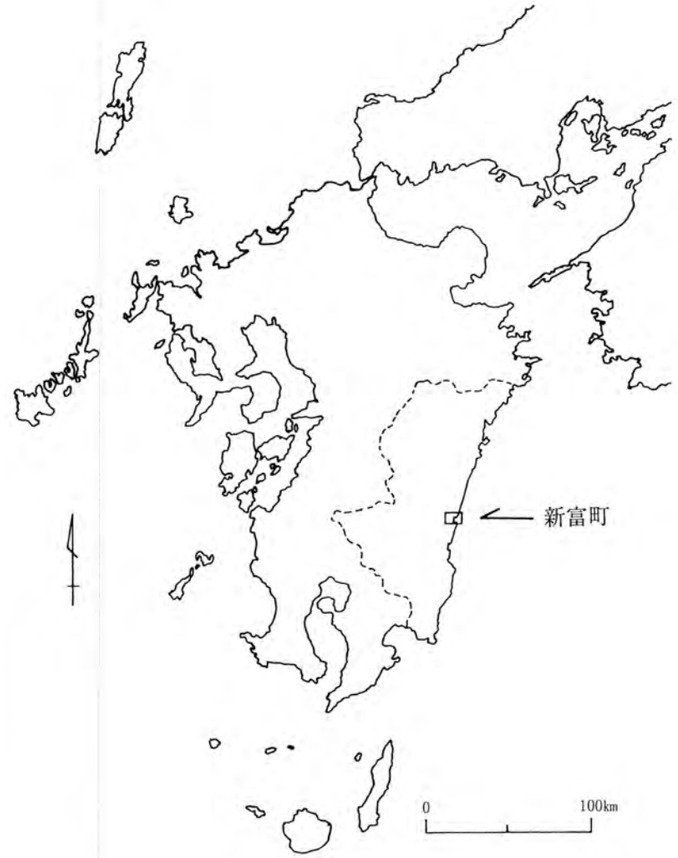
後期から終末期の調査例は少ない。しかしながら風早遺跡[7]の堰などの潅漑施設やその周辺の遺物の流入などから谷部を中心に水田経営を進めていた状況が想定でき、方形周溝墓・円形周溝墓を含む195基の土壙墓が発見された川床遺跡[8]では西日本全域に及ぶ広域的な交流が予想される。

④　古墳時代

前期の遺跡として海岸部の丘陵上に立地する下屋敷古墳がある。墳丘は前方後円形を呈し、内部主体が組合せ式木棺の日向地方でも最古の古墳と推定されている[9]。集団の墓域である川床遺跡とは、単独で立地し埋葬者が単体であるなど、被葬者の集団内での階層的差異が見られる。

やや時期がくだって山ノ坊古墳群、塚原古墳群、祇園原古墳群では墳丘50m以下の中小規模の前方





◎　主要な遺跡

1．川床遺跡
2．瀬戸口遺跡
3．祇園原古墳群
4．有峰城
5．新田原遺跡
6．銀代ヶ迫遺跡
7．八幡上遺跡
8．七又木遺跡
9．山之坊古墳群
10．石船古墳群
11．湯之宮遺跡
12．溜水遺跡
13．竹ヶ山城
14．塚原古墳群
15．富田城上ノ城
16．北田遺跡
17．富田城下ノ城
18．下屋敷古墳
19．風早遺跡
20．鐙遺跡
21．今別府遺跡
22．上薗遺跡
23．上日置城
24．藤掛遺跡
25．富田古墳群Ａグループ
26．富田古墳群Ｂグループ
27．永谷古墳群

第１図　町内の主要遺跡位置図

後円墳が継続して築造されるようになる[10]。ところで、前期の一ッ瀬川流域には西都原台地を中心として多くの首長墓が存在し、それぞれのグループは他を圧倒する規模ではないが、西都原台地上では複数の系列が台地上を共有して造墓活動をおこなっている[11]。町内の古墳群もこれら同流域での一勢力と理解できる。集落には山之坊古墳群に近接して銀代ケ迫遺跡があり、住居7～8軒で集落を構成しているが[12]、前方後円墳を築造しうる首長層の集落とは考えがたい。

中期になると、西都原台地上に女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳が登場し、同時に一ッ瀬川流域を含む日向地方全域において古墳群規模の拡大や縮小ないし断絶が認められる。このことは日向地方の首長層の再編を意味し、両古墳の被葬者が日向地方全域の盟主となったことを想定させる[13]。町の北西部にある祇園原古墳群は、この変動以後に前方後円墳が継続して築造された日向地方での後期最大規模の古墳群である[14]。同様に6世紀以後継続して築造される大淀川流域の下北方古墳群と拮抗しつつ、やや優位な関係を保ち終末期に至ったようだ。

一方、町の東部台地上には上薗遺跡で集落が形成される。現在町内で確認される5世紀後半以降の集落はここのみで、300軒以上の住居が確認されている[15]。また集落の縁辺や丘陵上には円墳や横穴墓が群集し、集落と墓域の関係を推定できる貴重な事例でもある。

⑤　古代～中世

上薗遺跡は14世紀頃まで営まれた集落で、町南部の沖積段丘面には古墳時代後期から中世の住居が確認された北田遺跡がある[16]。

古代の文献上では『倭名類聚抄』（935年）のなかに児湯郡8郷（三納・穂北・大垣・三宅・覩唹・韓家・平群・都野）があるが、現在の新富町に該当する郷はわからない。

その後『日向国図田帳』（1197年）のなかに、「湯宮・倍木・新田・下富田・宮頭」の地名が登場する。これらの地は荘園として領有されていたが、古代以前から開発され農地を拡大した村々の姿が想像できるため興味深い。

南北朝時代になると関東からの武士や在地豪族の横領などの混乱が続いたようだが、伊東義祐の全盛期には富田城周辺が外城の一つとして支配地の重要な位置にあった。

その後島津氏が伊東氏を追いやり支配するが、羽柴秀吉の九州進出によって現在の日置・三納代・上下富田地区が秋月高鍋藩に、新田地区が島津佐土原藩の領地となった。

この時期の集落は山城を中心に周囲に集住したものが多く、富田地区、新田地区には山城とその周辺には麓や城元の地名が散見する。町内で確認される中近世城跡は8箇所である。

⑥　近世以降

行政区域は明治22年に新田村・伊倉村が合併して新田村に、日置村・三納代村・上富田村・下富田村が合併して富田村になる。そして戦後の昭和34年に新田村と富田村が合併して新富町になったが、それぞれ別個の藩の支配を受けたため、慣習などの相違が現在でも見受けられる。

江戸終末から明治初頭における現在の新富町域の人口は約6,000人弱であった[17]。明治以降に現在の人口になったのは、全国的な人口増加以外に台地上の開拓による入植が理由として上げられる。

【注】

(1)長岡伸治「後期更新世における宮崎平野の地形発達」『第4紀研究』25-3　1986
　早田努「三　宮崎平野の地形発達史」『宮崎県史』通史編　原始古代　1997

(2)吉本正典「溜水遺跡」『新富町文化財調査報告書』第18集　1995

(3)茂山護・大野虎男「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第３号　1977
(4)日高孝治「瀬戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書』第４集　1986
(5)有田辰美「新富町の埋蔵文化財」『新富町文化財調査報告書』第１集　1982
(6)石川悦雄「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第４集　1986
(7)有田辰美「風早第Ⅰ・Ⅱ遺跡」『新富町文化財調査報告書』第14集　1992
(8)有田辰美「下屋敷古墳」『宮崎県史』資料編　考古２　1993
(9)有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第５集　1986
(10)有馬義人「５　新田原古墳群」『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』　1997
(11)柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号　1995
(12)近藤協「銀代ケ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集　1992
(13)注11文献
(14)注10文献
(15)谷口武憲「上薗遺跡Ｆ地区」『新富町文化財調査報告書』第18集　1995
(16)有田辰美・有馬義人「北田地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第17集　1995
(17)黒木正文「第１章　行政　第１節　六村時代」『新富町史』通史編　1992

第２章　「新田原古墳群」の概要

いわゆる「新田原古墳群」とは国指定史跡の行政名称である。昭和19年11月13日付けで指定告示を受けたこれらの古墳は、主として一ッ瀬川下流域の左岸台地上に分布し、そのほとんどが新田村にある同一の古墳群と解釈されたようである。

宮崎県内の多くの古墳群は「～村古墳」というような当時の行政単位で指定されたものが多い。しかし古墳の分布はそのなかでさらに分類できる例や、他の指定墳と同一グループとみなされる例がある[1)]。

「新田原古墳群」は明らかに前者の例であり、古墳が集中する４つのグループに大別できるため、現在ではそれぞれの中心となる字名を用いて東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼び、別個の古墳群として整理している[2)]。なお個々の古墳名は混乱を避けるため指定番号をそのまま使用しているので注意されたい。

以下では日向地方と一ッ瀬川流域の古墳分布、及び広義の「新田原古墳群」の周辺環境の変化や調査歴を整理する。

第１節　日向地方の古墳分布

宮崎県と鹿児島県大隅半島は律令期に大隅国が分国される以前には日向国として一括の行政単位で把握されていた。

これらの地域はいずれも日向灘に面し、背後に山地を抱える地形や、地下式横穴・高塚墳の形態や分布状態に共通性が認められるため、同様の地域と認識されていたのかもしれない。この共通性を考慮し、古墳時代においてはこれらの地域を「日向地方」と呼んでいる。

日向地方は東が太平洋に面し、西を山地に囲まれた山なりの地形である。九州山地からは10数本の大小河川が日向灘に東進し、その流域毎に平野や盆地が形成されている。

この地方の古墳時代の墓制には前方後円墳を中心とした高塚墳のほか、在地の地下式横穴・地下式板石積石室を内部主体にするものや、横穴墓がある。これらの分布はそれぞれの平野や盆地毎に以下の９つの地域に細分できる。

①志布志湾岸を中心とした地域（志布志地域）②広渡川を中心とした地域（広渡地

第２図　日向地方の古墳分布

域）③南西内陸部の都城盆地周辺（北諸県地域）④西部内陸部のえびの盆地周辺（西諸県地域）⑤大淀川中流から下流域を中心とした宮崎平野南部地域（宮崎地域）⑥一ッ瀬川と小丸川流域周辺（児湯地域）⑦耳川から塩見川にいたる海岸部一帯（南臼杵地域）⑧五ヶ瀬川流域一帯（東臼杵地域）⑨北西内陸部の高千穂盆地一帯（西臼杵地域）

このうち、②、④、⑨の各地域では前方後円墳がまったく認められず、特に④の北諸県地域では地下式横穴や地下式板石積石室を主体部とするものがほとんどで、⑨の西臼杵地域では横穴墓が多い。前方後円墳は宮崎地域と児湯地域を含む宮崎平野部だけで日向地方全体の約８割に及ぶため、これらの地域が日向地方で最も有力な勢力であったことがわかる。

「新田原古墳群」は⑥の児湯地域の一ッ瀬川左岸に位置する。

第２節　一ッ瀬川流域の古墳分布

一ッ瀬川は九州山地に源を有し、三納川、三財川などと合流して日向灘に流れている。古墳の多くは流域の台地上に分布し、全体で高塚墳が799基、うち前方後円墳が71基[3]、方墳が５基[4]円墳が717基、墳形不明６基がある（表１参照）。

各古墳群は前述のように旧村単位で国・県指定となっているものが多く、その名称が実際の分布状態と整合しない例が多いため、それぞれ仮称を用いて表１のようにまとめた。

この中で前方後円墳に着目すると右岸の西都原古墳群、左岸の祇園原古墳群がそれぞれ31基、14基と最も数が多く、周辺の古墳群では１～５基と少ない。前方後円墳規模の最大は西都原古墳群の女狭穂塚古墳で墳長177ｍである。このほか100ｍ以上の大規模墳は西都原古墳群の男狭穂塚古墳(167ｍ)、茶臼原古墳群の児屋根塚古墳(108ｍ)、三納古墳群の松本塚古墳(104ｍ)のみである。

横穴墓の分布域は現在確認できるだけで５箇所（計125基）あり、内陸の穂北横穴墓群、西都原古墳群、右岸の上田島横穴墓群、海岸部の富田古墳群Ｂグループ、永谷古墳群がある。

内部主体に地下式横穴が採用される例は４古墳群の計32基が確認でき、三財地下式横穴墓群、西都原古墳群、祇園原古墳群、富田古墳群Ｂグループである。

第３節　「新田原古墳群」の概要

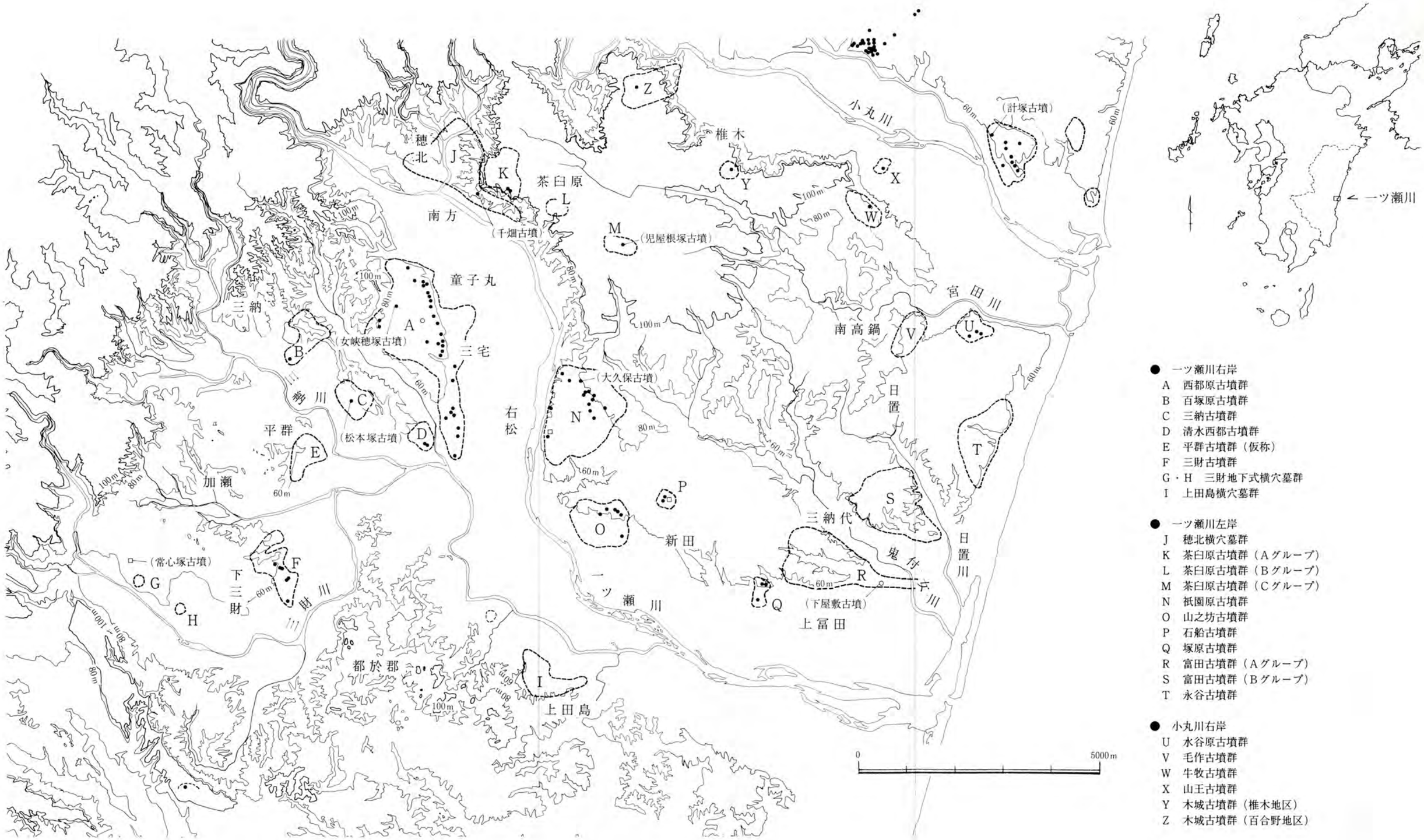
１．指定措置と周辺環境の変化

「新田原古墳群」が分布する台地は江戸時代には佐土原藩が領有し「新田牧」とよばれる軍用馬の放牧地であった。この牧場があった古墳群は広大な原野であったことや、古墳が先祖の墓であるという認識から、近世まで良好な状態で保存されてきた。

ところが、明治後期に始まった台地面の開拓はそれまでの荒野を広い畑地帯とした一方、多くの古墳が指定措置以前に煙滅したと考えられる。

大正年間に行なわれ貴重な学術成果を得た西都原古墳群の調査では、出土した遺物の珍しさが強調されたため、不況下にあった当時の要因も加わって、児湯郡内の多くの古墳が盗掘された。このように古墳が毀損にあう危険性があったことから、大正６年から昭和19年までの間に県内の多くの古墳群が国・県指定史跡となっていった。「新田原古墳群」が国指定となったのは昭和19年11月13日のことである。

その後、指定から半世紀が過ぎ、古墳群の周辺環境は大きく変化してきた。特に昭和40年代から始まった畑地帯の大規模なほ場整備は旧地形を造成し、その風景すらも激変させている。



第3図　一ッ瀬川流域古墳分布図

表１　一ッ瀬川流域の古墳数

地図番号	古墳群名（仮　称）	国・県指定名　称	高塚墳総数（うち検出古墳）	前方後円	円　墳	方　墳	不　明	横穴墓	内部主体に地下式横穴
A	西都原古墳群	西都原古墳	312(1)	31	279	1	1	6	12
B	百塚原古墳群	清水西原･三納村古墳	23(0)	2	21				
C	三納古墳群	三財村古墳･松元塚	10(0)	2	8				
D	清水古墳群	清水西原古墳	6(0)	2	4				
E	平群古墳群	三納村･三財村古墳	38(0)		38				
F	下三財古墳群	三財村古墳	39(0)	5	33		1		
G	上三財古墳群	三財村･常心塚古墳	3(0)		2	1			11
I	上田島横穴墓群	佐土原村古墳	0(0)					43	
J	穂北横穴墓群	上穂北村･千畑古墳	2(0)	1	1			60	
K	茶臼原古墳群 A	茶臼原古墳	37(0)	2	35				
L	茶臼原古墳群 B	茶臼原古墳	9(0)		9				
M	茶臼原古墳群 C	茶臼原古墳	9(0)	1	8				
N	祇園原古墳群	新田原古墳	190(36)	14	174	1	1		6
O	山之坊古墳群	新田原古墳	41(2)	6	34		1		
P	石船古墳群	新田原古墳	4(0)	2		1	1		
Q	塚原古墳群	新田原古墳	6(0)	3	3				
R	富田古墳群 A	富田村古墳	7(0)	6		1			
S	富田古墳群 B	富田村古墳	51(16)		50	1		14	3
T	永谷古墳群	富田村･高鍋村古墳	12(0)		12			2	
合　計			799(55)	71	717	5	6	125	32

※古墳数は以下の文献を参考に作成した。
(1)『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県史編さん室 1993
(2)『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』宮崎県史編さん室 1997
※不明の内訳は「①男狭穂塚古墳、②三財村１号墳、③新田原175号墳、④新田原13号墳、⑤新田原42号墳、⑥下屋敷古墳」である。
※高塚墳総数のうち( )内は発掘調査によって検出された周溝のみのものである。

「新田原古墳群」のうち祇園原古墳群南部の春日地区でほ場整備が始まったのは昭和43年のことである。これらの換地作業に連動して初めて指定地の買収計画が浮上し、それから3ヵ年にわたって多くの指定地が買収されていった。

また平成4年には祇園原古墳群北部でほ場整備が計画され、多くの古墳が予定地にあった。そこで町教育委員会は遺存する古墳の周溝部や、発掘調査で検出された墳丘を失った円墳の周溝を指定地として買収し、古墳公園として整備活用することとした。

平成8年度には専門検討委員会を召集し、その検討の結果から整備基本計画書を作成した。

2．既往の調査概要

1825年、児玉実満は「笠狭大略記」を著し、1772～81年に行なわれたという石船塚古墳(新田原45号墳)の石棺発掘の経緯を記している。「新田原古墳群」の所見事例である。

明治時代には県下の古墳を分布調査する試みが行なわれ、平部峡南、坪井正五郎、三浦敏によってそれぞれ「日向地誌」「日向の古物遺跡」「遺跡遺物地名表」がまとめられている[5]。

大正時代には西都原古墳群調査で来県した梅原末治らによって祇園原古墳群の「大久保塚、百足塚、瓢箪塚、弥吾郎塚、一丸塚、霧島塚」が初めて紹介された[6]。

昭和14年には陸軍の基地建設が計画され、石船古墳群が梅原末治により調査されている。「新田原古墳群」初の学術調査であった[7]。この調査では前方後円墳2基と方墳1基、墳形不明1基が対象となったが、いずれも短期間のため内部主体の調査に終始している。しかし原田仁による墳丘測量図の作成と梅原末治による内部主体と出土遺物の報告は石船古墳群のおおよその築造時期が推定できる重要な資料である。

また学術調査ではないが、大正年間には山之坊古墳群から画文帯環状乳神獣鏡、獣文縁獣帯鏡などの遺物が出土しており、特に鏡の数面は埼玉県稲荷山古墳などとの同笵関係が指摘されている。

昭和50年代以降になると開発行為を行なう際に必ず埋蔵文化財の調査を実施することが周知化され、本町教育委員会にも埋蔵文化財担当職が設置された。このことから大規模な発掘調査が可能となり、昭和59年には川床遺跡[8]、昭和63年には七又木遺跡[9]の調査が行なわれ、古墳群周辺の調査事例が多くなった。

特に平成4年度の祇園原地区遺跡の調査では多数の消滅墳の周溝が検出され、内部主体に地下式横穴が採用された例や馬の埋葬土壙の存在も判明している[10]。

また平成4年度以降は指定追加の基礎資料としての墳丘測量調査や試掘等の確認調査が継続して実施され、宮崎大学考古学研究室との共同調査で多くの基礎資料を得ている[11]。

3．古墳群の分布と築造時期

前述のとおり「新田原古墳群」は4つの古墳群からなっている。今回調査対象とする祇園原古墳群以外は次のとおりの築造時期が推定される。

(1)塚原古墳群

「新田原古墳群」のうち最も東に位置し、台地面と低位段丘面に分布する前方後円墳3基、円墳2基からなる。前方後円墳のうち台地上にある3号墳は墳長66mで、その墳形から4世紀後半の築造時期が推定されている[12]。平野部にある1号墳は前方部が既に失われており墳長は不明で、川西編年Ⅴ期の円筒埴輪を採用しているため6世紀の築造時期が推定される。

他の時期不明な古墳をあわせても数は少なく、継続した首長墓系譜は認められない。

(2)石船古墳群

新田原台地の内陸にあり、前方後円墳2基と方墳1基と墳形不明1基からなる。前述のとおり昭和14年の調査後に消滅しており、現位置は新田原自衛隊基地の滑走路になっている。

調査では45号墳(前方後円墳)と44号墳(方墳)から横穴式石室が検出され、42号墳(墳形不明)からは粘土槨が発見されている。築造時期はそれぞれの主体部から検出された須恵器から45号墳→42号墳→44号墳の推移が予想されており、前方後円墳の築造が6世紀後半に終了し、かわって首長墓として方墳が採用されることが判明している[13]。42号墳については梅原報告のなかで前方後円墳と報告されているが、円墳の可能性がある。

(3)山之坊古墳群

石船古墳群の南側の台地端部から低位段丘面に位置する古墳群である。発掘調査された古墳は皆無であるが、大正年間に出土した画文帯環状乳獣帯鏡などが著名である。

昭和40年代には10号墳（円墳：径約20m）から円筒埴輪が検出され6世紀の築造が推定とされている[14]。平成6年には30号墳が墳丘測量され、4世紀代の築造年代が予想される。

調査されていない前方後円墳の多くは前方部が後円部に対して低平で狭長な墳形のものが多いため前期から中期初頭までの首長墓系譜が想定できる。

【注】

(1)後者の例には「三納村古墳」と「清水西原古墳」のように同一群にありながら行政区域が異なるため別個に指定されているものがある。

(2)有馬義人「5．新田原古墳群」『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』 1997

(3)前方後円墳数には男狭穂塚古墳は含まない。

(4)方墳は次のとおり。常心塚古墳、西都原171号墳、新田原139号墳、新田原44号墳、蔵園Ａ－６号墳。蔵園Ａ－６号は発掘調査で検出され富田古墳群Ｂグループにある。

(5)面高哲朗「後章　本県の考古学上の諸問題と展望
第１節．四．古墳時代」『宮崎県歴史』通史編原始・古代１　1997

(6)梅原末治「日向、西都原附近の古墳」『歴史地理』25－２　1915

(7)梅原末治「新田原古墳調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯　1941

(8)有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第５集　1986

(9)近藤　協「七又木遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集　1992

(10)谷口武範「祇園原地区遺跡」『県営農村基盤整備パイロット事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』1996

(11)新富町文化財調査報告書第15～20集　1992～1996

(12)柳沢一男「新田原３号墳」『宮崎考古』第14号　1995

(13)長津宗重「各地域の最後の前方後円墳－宮崎県」『古代学研究』102号　1984

(14)有田辰美「47．新田原古墳群」『宮崎県史』資料編　考古２　1993

第３章　平成９年度の調査

本年度の調査対象は祇園原古墳群Ａグループの前方後円墳のうち59号墳と百足塚古墳である。

Ａグループにある大久保塚古墳から弥吾郎塚古墳までの10基の前方後円墳は平成５年度から８年度までに59号墳を除きすべて墳丘測量図を作成している。今回の調査では59号墳の墳丘測量図を作成しＡグループの全体図を完成させる目的がある。なおこれまで作成された他の墳丘測量図は第４章で整理しているので参照されたい。

また整備の中心となる百足塚古墳では周溝の遺存状態を把握するため、合計３箇所の調査区を設定している。

以下では祇園原古墳群の概要をまとめ、それぞれの調査内容を概述する。

第１節　祇園原古墳群の概要

祇園原古墳群は新富町大字新田字祇園原～春日と一部西都市右松に分布する古墳群で、その範囲は南北1.3km、東西1.5kmに及ぶ。前方後円墳14基、円墳138基、方墳１基、墳形不明１基の合計154基が現存するが、近年の調査で36基の円墳の周溝が検出されるため、今後の調査によってさらに古墳数は増加すると考えられる。

分布する地形は新田原台地の標高70～90ｍの台地面で、70～80ｍの低位台地面と80～90ｍの高位台地面に大別できる。また低位台地面には南へとつづく東西２本の谷があり、この谷に挟まれた微高地上に古墳が集中している。特に西谷は台地面に深く入り込み、このことで古墳群をさらにいつくかのグループに分けられ、仮にまとめると次のようになる（図３参照）。

Ａグループ：東側の高位台地から低位台地に至る部分で前方後円墳が最も集中しており、分布域も広い。弥吾郎塚古墳から68号墳にかけての西側には南へとつづく小谷が認められ、これを挟んだ対面にも古墳が散見する。

Ｂグループ：霧島塚古墳以外はすべて小円墳で密集度が高い。主体部に地下式横穴が採用されている例がある。

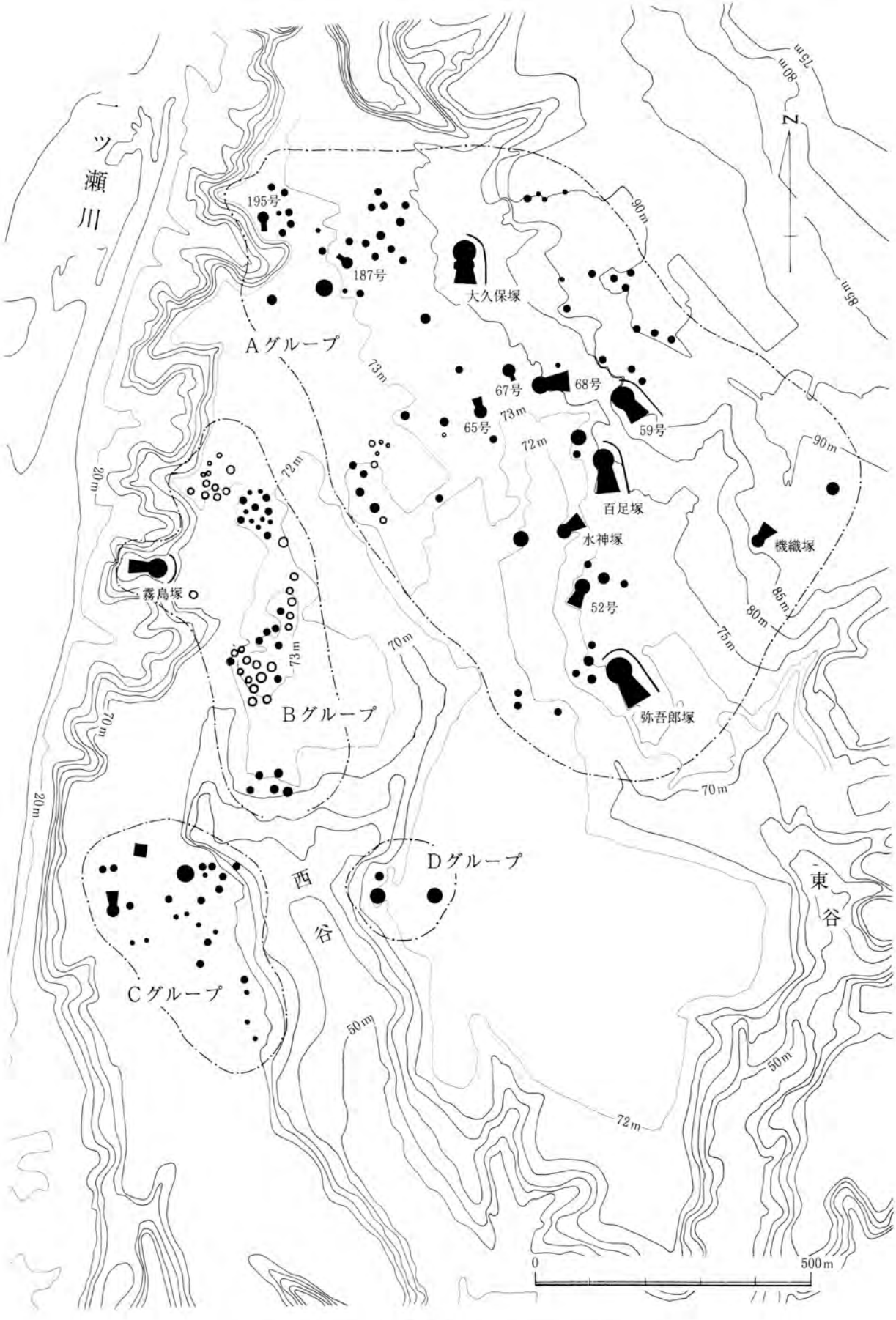
Ｃグループ：Ｂグループとは西の谷を挟んでやや離れている。前方後円墳１基、方墳１基のほか中規模な円墳が１基あり、他は小円墳である。地下式横穴を主体部にする円墳がある。

Ｄグループ：中規模な円墳が３基あり、Ｂ・Ｃグループとは西谷を挟んだ位置にある。

上記のグループのうちＡグループの北部には前方部が後円部に対して低平で狭長な前方後円墳が２基確認でき、前期の築造が推定できる。中期にはクビレ部の両側に造出しがあり川西編年Ⅲ期の円筒埴輪を採用した大久保塚古墳がある。後期には百足塚古墳に継続する前方後円墳が連続して築造されている。

これに対し、Ｂグループでは時期不明の霧島塚古墳以外は６世紀後半になって群集する小円墳で、なかには地下式横穴を主体部とする円墳もある。

またＢグループの方墳やＤグループの中規模円墳はグループ内のほかの小円墳と比較して規模が卓越しているため終末期古墳の可能性がある。



第４図　祇園原古墳群古墳分布図（１：10000）

第２節　新田原59号墳の調査概要

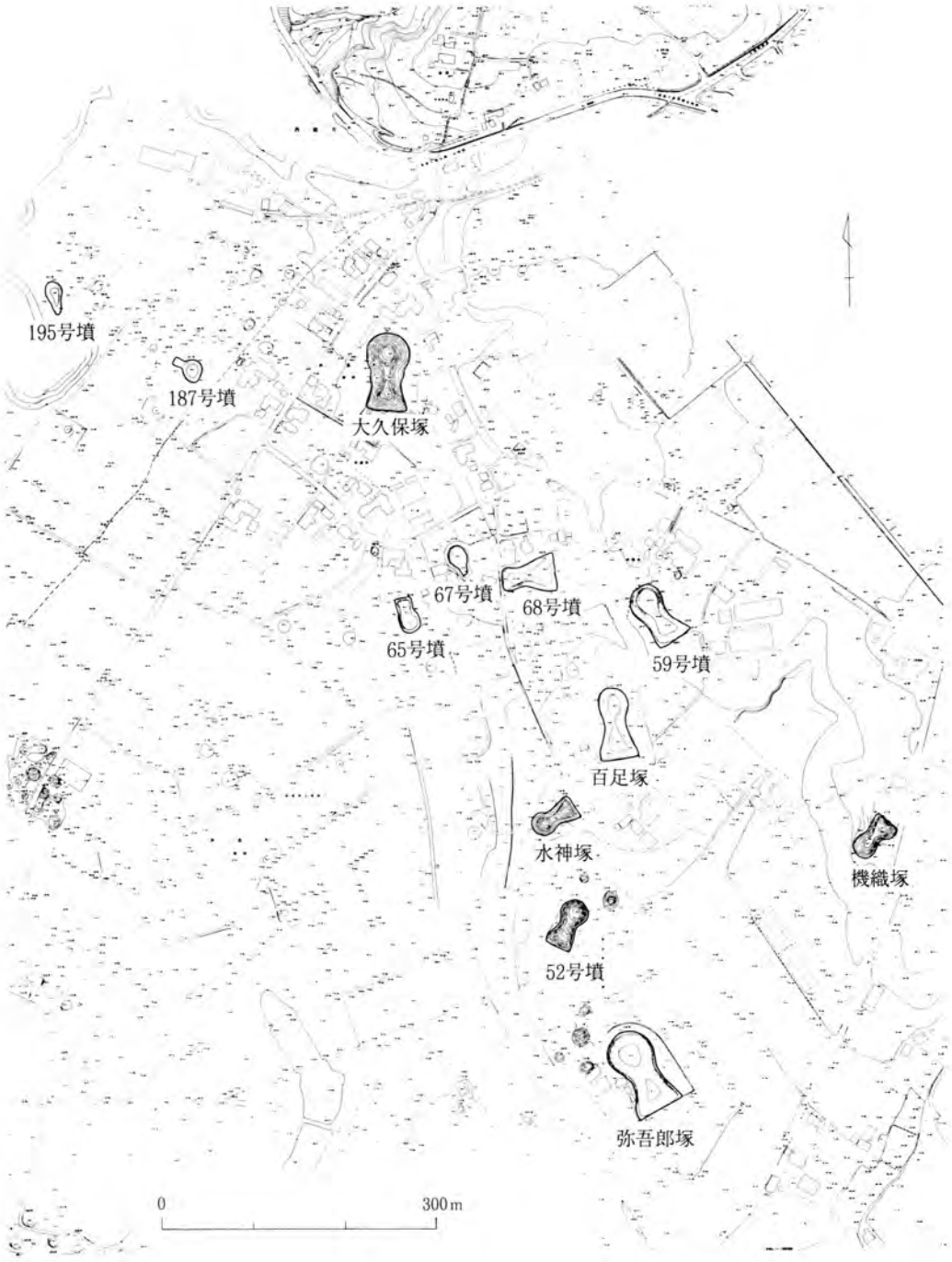
①古墳の立地

Ａグループの前方後円墳のうち最も高い場所にある前方後円墳で前方部を南に向ける。

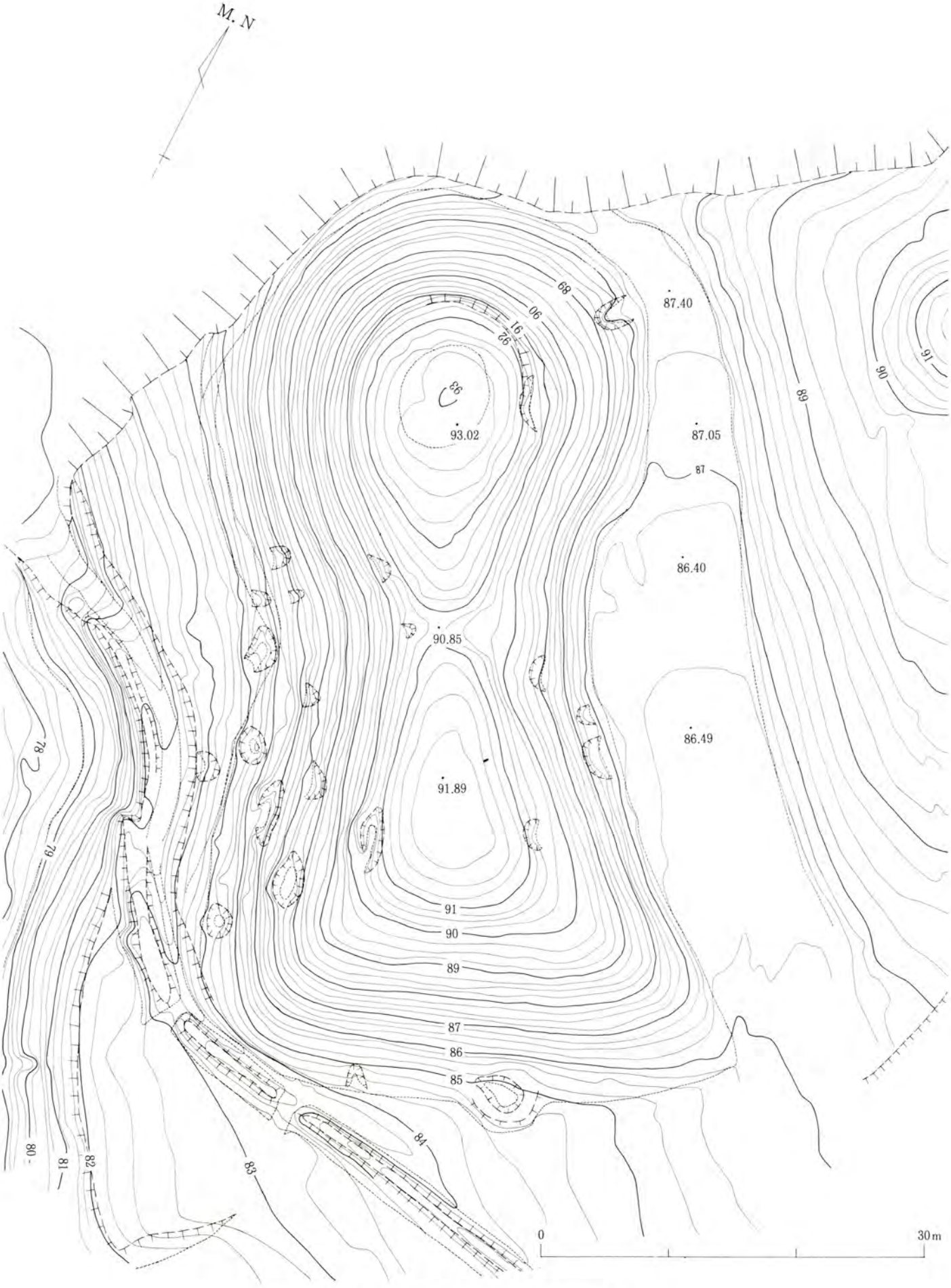
墳丘東側には小円墳が点在し、川床遺跡などが広がる高位台地面へつづく。西側は急斜面で、南西側は百足塚古墳の周溝がありこの古墳との間には湧水が認められる。

②調査の方法

墳丘上は以前の台風で多くの杉が倒れていたため、樹木と下草を伐採し、のちに前方部から後円部を見通し主軸とした簡易座標を設定した。



第５図　祇園原古墳群Ａグループ古墳位置図



第６図　新田原59号墳墳丘測量図（１：400）

座標設定には主軸に10cm角のプラスチック境界杭を使用し、周辺には木製杭を設置している。座標の読み込みは宮崎大学教育学部考古学研究室所有のトータルステーションを借用し、前方部頂上を原点とし後円部頂上を示準した簡易座標を設定している。

標高は百足塚古墳前の町道にある公共座標から移動し、25cm間隔の等高線をオートレベルで測量した。

平板は田村式平板を、計測にはソキア社の光波アリダード（MINIAR）を使用し、図面は１／200の縮尺で実測した。

特に墳丘測量経験者の少ない時に便利な方法として「計測点追尾法」がある。これはレベルで高さをだした点に串を差し、後から平板で追尾して実測する単純な方法だか、人数が少ない場合に有効であるほか、等高線の微妙な変化を現地で検討しながら変更して図化できる利点がある。

このとき使用する串は農業用のグラスファイバー製の支柱を長さ50cmに切り揃えたもので、色の異なるものを４種類200本毎の計800本ほど用意するといい。

このほか重要な作業として、墳丘基底や墳頂平坦面そして段築のテラス面などの墳丘変換線を現状で確認できる部分で計測した。余談であるが、多くの墳丘測量ではこれらの変換線を示さないものが多いため注意を要したい。

調査は平成９年７月５日から伐採作業を開始し、測量調査を８月31日まで継続した。諸般の都合で測量は墳丘周囲のみに止まっているため、来年度の調査で補いたい。

③調査の結果

後円部・前方部ともに２段築成の前方後円墳で、前方部をＮ－152°－Ｗに向ける。墳丘東側には盾形周溝が遺存し、西側と北側は急崖になっている。前方部西側には土塁状遺構があり墳丘との間を堀で切断している。これは後世の改変にともなうもので新田牧の一部ともいわれる。

内部主体は不明で外表施設に葺石は認められないが、墳丘のいたる所から円筒埴輪片が表採できる。

墳丘は東から西への傾斜地に築造されているため基底面が東西で異なり、特に東側の裾部は不明瞭でその位置がわからない。墳丘各所のデータは次のとおりである。

墳長71ｍ、後円径32ｍ・同高（東側６ｍ、西側８ｍ）、前方部幅42ｍ・同長38ｍ、同高（東側５ｍ、西側７ｍ）クビレ部幅24ｍ、後前高差－１ｍ。

築造時期は内部主体が不明のうえ須恵器等の出土遺物にかけるため断定できないが、表採された円筒埴輪が川西編年Ｖ期に相当し、しかも百足塚古墳出土のものよりタガの突出が低く、外面調整が荒いことを考慮し、百足塚古墳造営後の６世紀中頃とみておきたい。

第３節　百足塚古墳調査概要

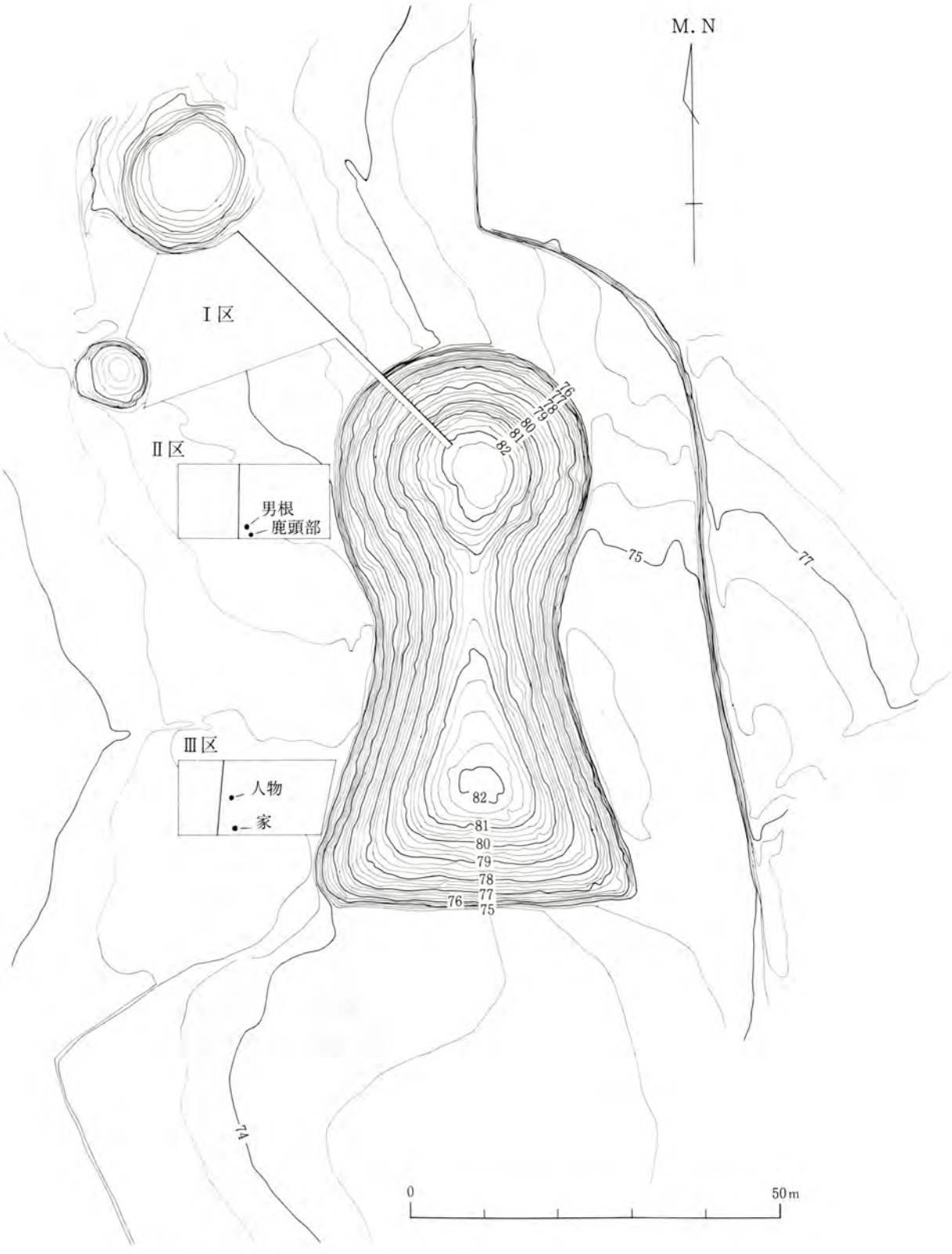
①古墳の立地と概要

59号墳の南西側にあり、Ａグループのほぼ中央に位置する前方後円墳である。後円部、前方部ともに２段築成で前方部をほぼ正南に向けている。墳丘東側には現状で深さ約1.5ｍの周溝が遺存し数ヶ所のトレンチ調査で西側にも確認されているため、盾形に復元できる。

内部主体は不明であるが、東側クビレ部に人頭大からそれ以上の礫が露出しているため横穴式石室の可能性が高い。外表施設に葺石はないが埴輪が大量に表採できる。

平成５年度に墳丘測量調査を行なっており、データは次のとおりである。

墳長76.4ｍ、後円径32ｍ・同高8.8ｍ、前方部幅43.6ｍ、同高6.3ｍ、クビレ部幅38ｍ、後前高差－0.4ｍ。



第７図　百足塚古墳トレンチ配置図（１：800）

また近接して北西側には62号墳（径約10m）と63号墳（径約30m）の円墳があり、62号墳からは百足塚古墳と形態が近似する円筒埴輪が出土しているため同時期の築造が予想される。

②調査の方法

墳丘の西側は現状で周溝が確認できず、近接する２つの円墳との周溝の切り合いを確認するためＩ区を設定した。また同様に後円部西側と前方部西側の２箇所に周溝の状態を確認する幅の広い調査区を設定した。

墳丘では段築の状況を確認する幅２ｍのトレンチを後円部頂上から北西部に延ばしている。

③調査の結果

Ｉ区：調査区内は造園業者の樹木地であったことからかなり削平されており、あちこちに重機による撹乱が認められた。しかし62号墳・63号墳のいずれも良好な状態で周溝が検出され互いに切り合っていない。62号墳の周溝内には円筒埴輪の破片が大量に転落しており、小量の須恵器片も混入している。63号墳の周溝内には62号墳に樹立されていた埴輪の破片が混入しているため、この古墳がのちに築造されたことがわかる。周溝底は63号墳で表土から約１ｍ以上あり、62号墳の周溝と比較すると深い。58号墳の周溝はＩ区内では認められず、既に削平されている可能性が高い。

また調査区の中央と南よりからは弥生時代中期後半から後期の土器と住居跡が確認でき、住居跡は方形プランを呈している。

Ⅱ区：後円部西側にあたり周溝の立ち上がりが検出されている。周溝内の墳丘よりと外側に埴輪片の集中が認められ、特に墳丘側からは須恵器の甕がつぶれた状況で検出された。祭祀にともなう供献品の可能性がある。

周溝外側の埴輪片の中には鹿形埴輪の頭部と男性の人物埴輪男根が検出されている。ともに九州初の事例であるが全体を復元するまでの破片は採集されていない。

また周溝外部はアカホヤ面が遺存しておりそれを掘り込んで弥生時代後期の方形プランの住居跡１軒が検出されている。

Ⅲ区：前方部西側の周溝が確認でき、周溝外４ｍの地点で再び一段低くなっている。Ⅱ区と同様に周溝内の墳丘側と外側から大量に埴輪片が検出され、特に外側には家・人物・動物・盾などの多種の形象埴輪がある。また周溝外の一段低くなったところからも同様に多種の形象埴輪が検出されているため、周溝外のこの場所が堤状に造成され、この上に形象埴輪群が整然と配置されていた可能性が高い。

④　まとめ

本年度の調査は諸般の都合で59号墳・百足塚古墳のいずれも調査途中で終了せざるを得なかった。特に百足塚古墳の周溝部から出土した多くの形象埴輪はいまだに現地で保存しているため、来年度の調査でこれを記録し今後調査区の拡大と記録の徹底を計りたい。

第４章　資料整理(1)

本章ではこれまでに祇園原古墳群のＡグループで測量調査された前方後円墳の測量図を紹介する（第５図参照）。

これらの測量図は平成５年度から平成８年度にわたって年に約２基つづ調査してきたもので、その多くは宮崎大学教育学部考古学研究室との合同で行なわれた。その成果はこれまで概要報告や県史編纂等で既に紹介されたものが多いが、不足した部分を訂正し今回あらためて集成しておく。なお百足塚古墳と59号墳の測量図は未完成なためデータのみ掲載しておく。またＡグループ北側の２基の前方後円墳は西都市の行政域にあるため、今後協議して測量していきたい。

①　機織塚古墳（新田原47号墳）

高位台地の傾斜面に位置し、前方部を東側に向けてつくられている（主軸：Ｎ－ 53°－Ｅ）。　前方部東側が道路造成時に削平されているが、全体的には墳端部を明瞭に残している。平成６年度の試掘調査時には墳丘に沿ってめぐる周堀が検出された。後円部西側の墳端部にはテラス状の段が確認されるが、墳丘全体をめぐるのか明らかではない。

墳丘は49.6ｍで、後円径24.8ｍ、同高4.2ｍ、前方部幅30ｍ、同長24ｍ、同高6.3ｍで、後前高差＋2.1ｍである。前方部・後円部ともに２段築成である。

前方部・後円部それぞれの墳頂平坦部に盗掘壙があるが未調査のため内部主体は不明である。

外表施設には葺石がなく、埴輪や須恵器は表採されている。円筒埴輪は外面調整が一次タテハケのみで最下段のタガに断続ナデ技法が認められるため、川西編年Ｖ期新式に相当する。

②　弥吾郎塚古墳（新田原48号墳）

Ａグループの前方後円墳のうち最も南よりにあり前方部を南に向けている（主軸：Ｎ－160°－Ｅ）。墳丘の東側に幅約10ｍ、深さ約2.5ｍの周溝が遺存するが、後円部北側から西側にかけて徐々に不明瞭になり、前方部南側では確認できない。

墳丘は94ｍ、後円径52ｍ、同高9.75ｍ、前方部幅54ｍ、同長44ｍ、同高８ｍで、クビレ幅36ｍ後前高差－1.75ｍである。

後円部は平面形が正円ではなく、北西から南東に向けて主軸をとる楕円形で、墳頂平坦面は墳丘規模に対して小さく、クビレ部西側から後円部の中心に向けて陥没抗状の凹みが認められる。

この凹みから巨石を抜いたとの伝承があるため、長大な横穴式石室の存在が予想される。

前方部・後円部ともに２段築成で外表に葺石はなく、埴輪などの出土遺物は皆無である。

③　新田原52号墳

Ａグループの南にあり、弥吾郎塚古墳の北に位置する前方後円墳である。墳丘周囲は耕作によって掘削された箇所が多く墳頂には戦時中に兵隊が掘ったという土壙が数多くある。特に後円部の土壙は大きく、最近公表した金銅製単龍柄頭はここから出土したものだという。

また後円部の墳頂平坦面は墳丘規模に対してこの時期の古墳としては広すぎるため、土壙掘り下げによる改変と思われる。

墳丘は54.8m、後円径29.6m、同高4.9m、前方部幅30m、同長27.6m、同高4.6mで、クビレ幅18.4m、後前高差－0.3mである。

外表に葺石はなく、埴輪も表採されない。

④　水神塚古墳（新田原56号墳）

百足塚古墳の南西に位置し、前方部を東北東に向けて造られている（N－60°－E）。

墳丘の周囲は全面にわたって掘削され、急崖になっている。周堀は前方部前端側を除き墳丘周囲を盾形にめぐることが試掘調査によって確認されている。

墳丘は49.4m、後円径23m、同高5.8m、前方部幅30m、同長28.2m、同高6.3mで、クビレ幅15.4m、後前高差＋0.54mである。前方部、後円部ともに２段築成である。

内部主体は不明で外表施設に葺石はないが、埴輪や須恵器が採集されている。形象埴輪には人物埴輪腕部や盾などがある。円筒埴輪は最下段に断続ナデ技法が認められ、川西編年Ｖ期新式に相当する。

⑤　新田原65号墳

Ａグループの中程にあり谷の西側に位置する前方後円墳である。古墳周囲は畑であるが近接して宅地があるため他の古墳との位置関係が確認しづらい。墳丘は前方部の掘削が激しく、他の側面にも形状の変化が認められる。

いずれも現状で、墳長39m、後円径22.6m、同高3.4m、前方部幅18.8m、同長16.4m、同高３mで、クビレ幅17m、後前高差－0.4mである。前方部、後円部ともに２段築成である。

外表には以前の試掘調査で葺石が検出されている。埴輪は表採できない。

⑥　新田原67号墳

65号墳の北西側に近接する前方後円墳である。墳丘の西側には家があり、その他の３面は畑で囲まれている。特に後円部側は畑自体を一段低くした造成が認められるため、墳丘の基底は現状の畑面ではなく、一段高い付近であろう。

現状では、墳長37.4m、後円径13.2m、同高4.2m、前方部幅14m、同長12m、同高1.4mでクビレ幅11m、後前高差は－2.8mである。

内部主体の調査はなく、外表施設の葺石や埴輪の有無は不明である。

⑨　新田原68号墳

67号墳の東側にあり前方部を東に向けて築造されている（主軸：N－128°－E）。北側は人家が近接しており、後円部西側は町道によって大きく掘削されている。前方部東側に認められたという周溝は近辺の土砂採取時に埋められたらしい。

現状では、墳長60.4m、後円径27m、同高７m、前方部幅44m、同長35.4m、同高8.1mでクビレ幅24.4m、後前高差は＋1.1mである。

前方部・後円部ともに２段築成で葺石はなく、埴輪なども採集されていない。

後円部北側には防空壕が掘られているが内部主体は不明である。

⑩　大久保塚古墳（新田原92号墳）

Ａグループの前方後円墳のうち最も北に位置する前方後円墳で、前方部を南に向けて築造している（主軸：Ｎ－172°－Ｗ）。

周堀は墳丘東側で遺存し、西側では確認できないが盾形周溝と推定される。前方部南側の周溝内には人家があり、墳丘裾部が掘削されている。墳丘裾部を水路がほぼ全周し、墳端が削平耕作されている。

現状では、墳長84ｍ、後円径46ｍ、同高７ｍ、前方部幅45ｍ、同長37ｍ、同高6.5ｍでクビレ幅35ｍ、後前高差は－0.5ｍである。

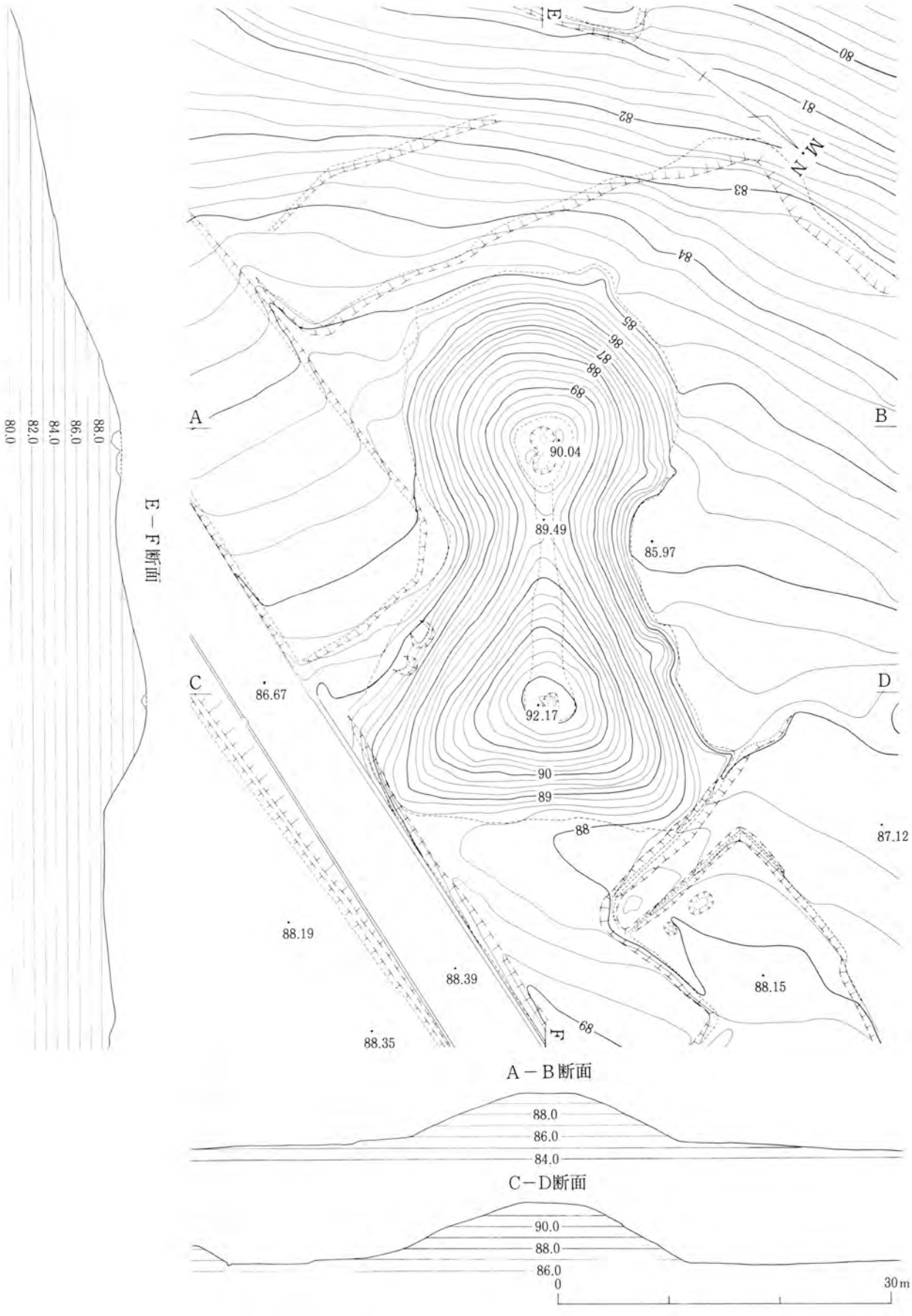
前方部・後円部ともに３段築成で、外表に葺石があり、クビレ部の両側には造出しがある。

調査歴がなく内部主体は不明であるが、多くの埴輪片が採集されている。円筒埴輪は外面調整け２次ナデを施し、器表に黒斑が認められる。タガは１㎝以上の突出があり丁寧な貼りつけのものが多い。同様の形態をもつ埴輪は西都原古墳群の女狭穂塚古墳があり本墳と前後する時期の築造が推定できる。また墳形は茶臼原古墳群の児屋根塚古墳の５分の４に近く、同古墳との関係が注意される。

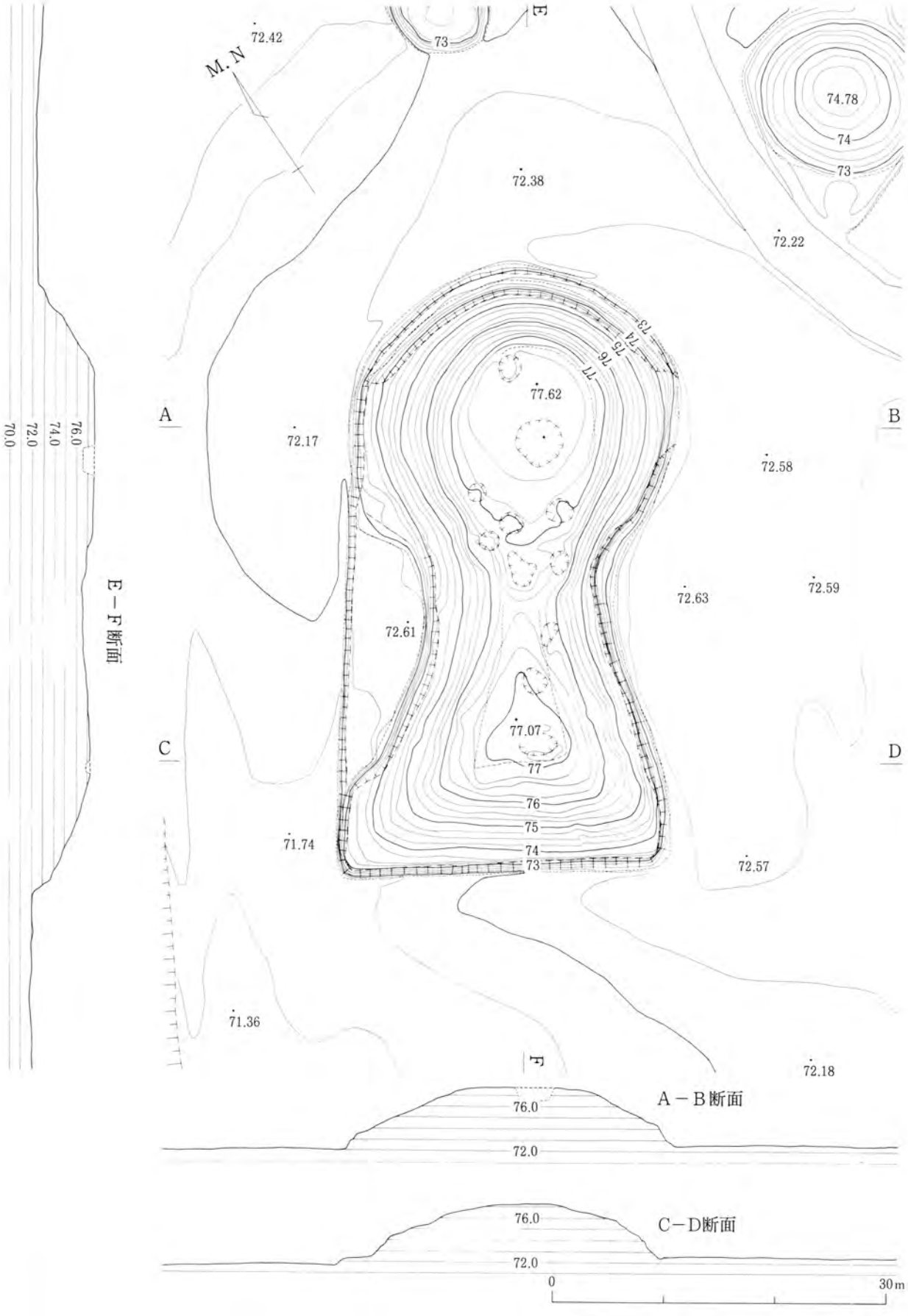
祇園原古墳群Ａグループ　前方後円墳墳丘測量データ一覧

（単位：m）

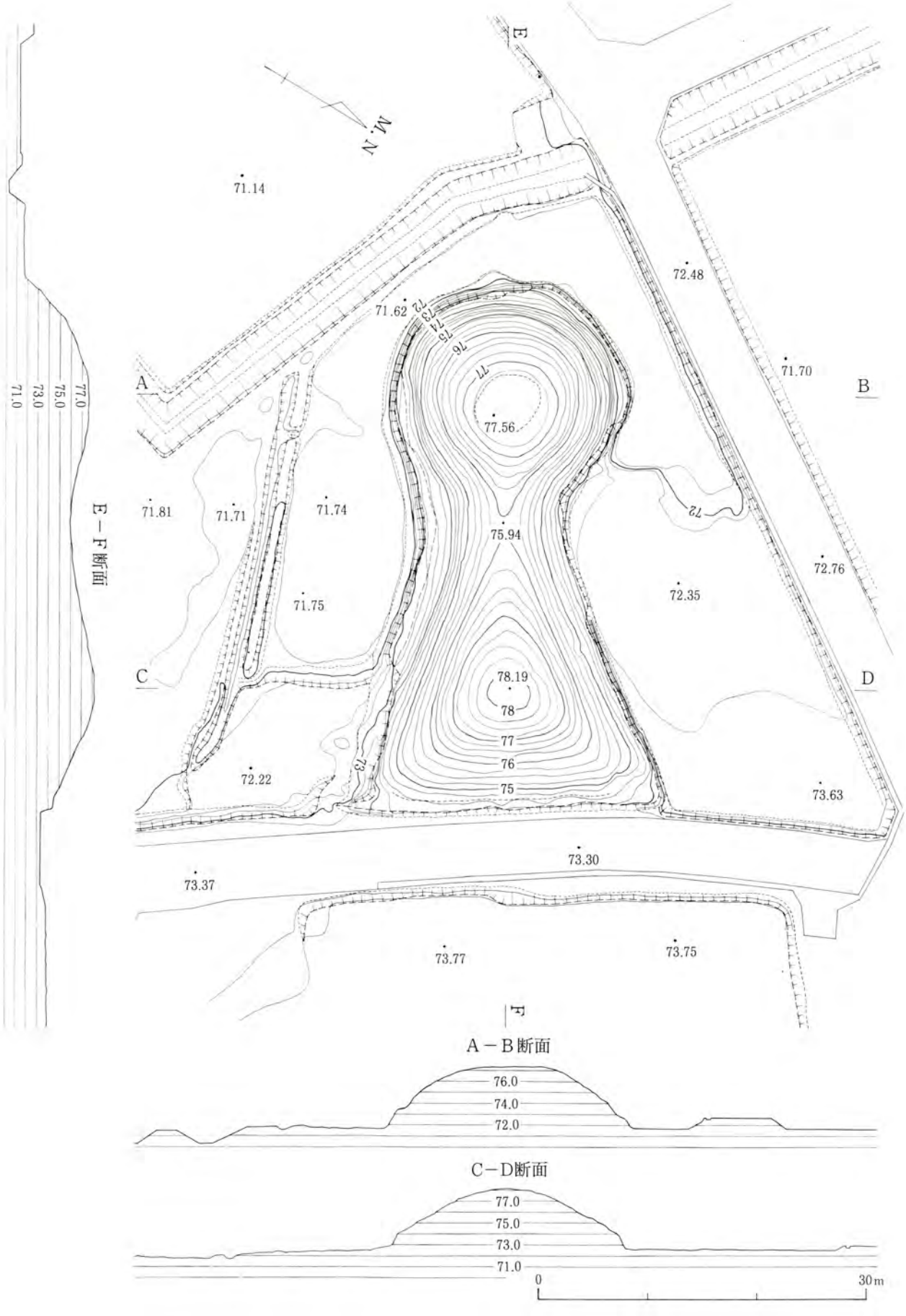
古　墳　名	墳長	後円部		前方部			後前高差	クビレ幅	造出	葺石	埴輪	周溝	方位
		径	高	幅	長	高							
機織塚古墳（47号墳）	49.6	24.8	4.2	30.0	26.2	6.3	＋2.1	16.4			○	○	N- 53°-E
弥吾郎塚古墳（48号墳）	94.0	52.0	9.8	54.0	45.0	8.0	-1.8	36.0				○	N-160°-E
52号墳	54.8	29.6	4.9	30.0	27.6	4.6	-0.3	18.4				○	N-145°-W
水神塚古墳（56号墳）	49.4	23.0	5.8	30.0	28.2	6.3	＋0.5	15.4			○	○	N- 58°-E
百足塚古墳（58号墳）	76.4	33.2	8.8	43.6	42.0	8.4	-0.4	38.0			○	○	S
59号墳	71.0	32.0	西8.0 東6.0	42.0	38.0	西7.0 東5.0	-1.0	24.0			○	○	N-152°-E
65号墳	39.0	22.6	3.4	18.8	16.4	3.0	-0.4	17.0		○		○	N- 12°-W
67号墳	37.4	13.2	4.2	14.0	12.0	1.4	-2.8	11.0		?		?	N-160°-E
68号墳	60.4	27.0	7.0	44.0	36.0	8.1	＋1.1	24.4				○	N- 81°-W
大久保塚古（92号墳）	84.0	46.0	7.0	45.0	42.0	6.5	-0.5	35.0	○	○	○	○	N-172°-W
新田原187号墳	未測量												
新田原195号墳	未測量												



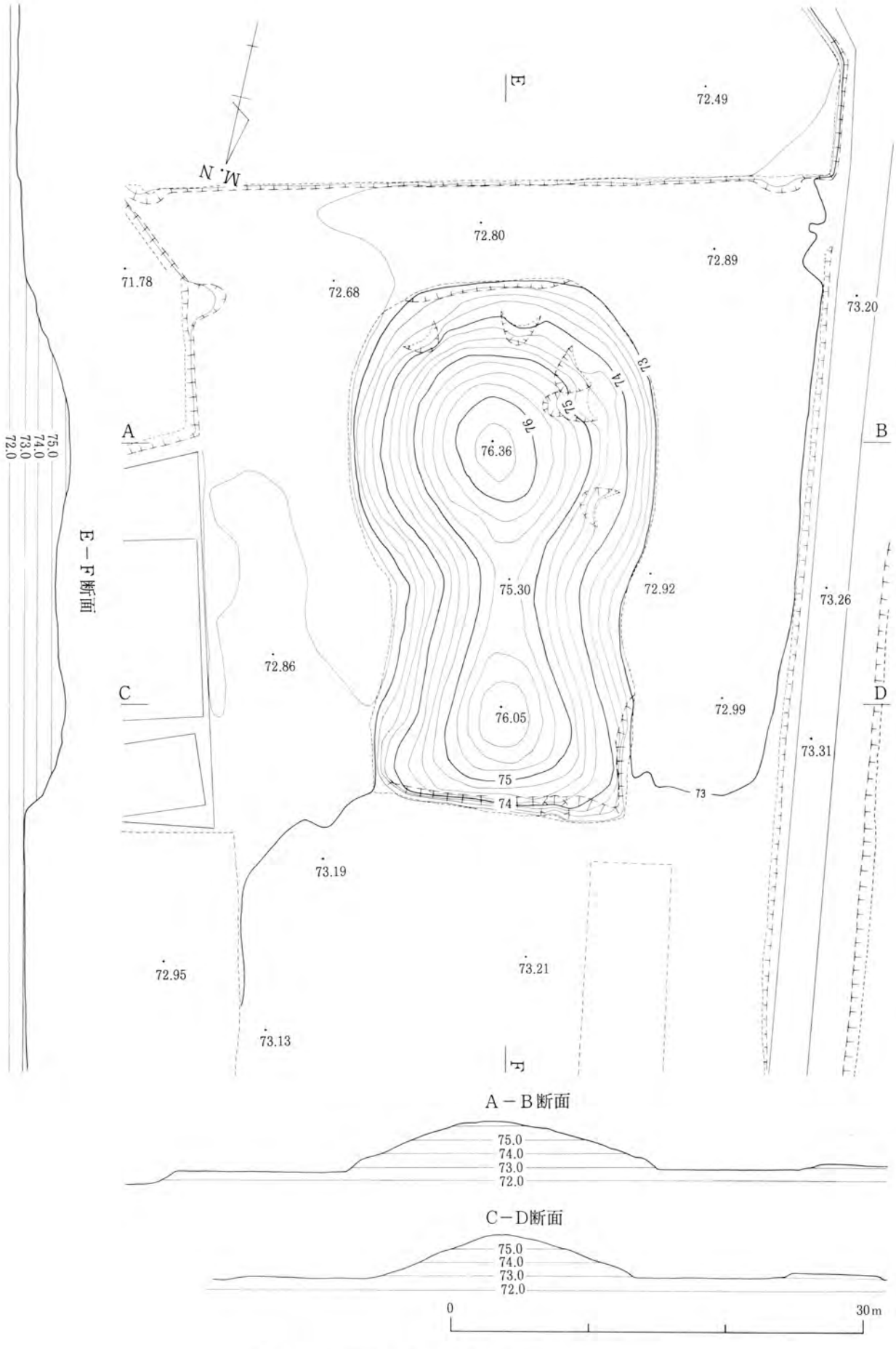
第８図　機織塚古墳墳丘測量図（１：500）



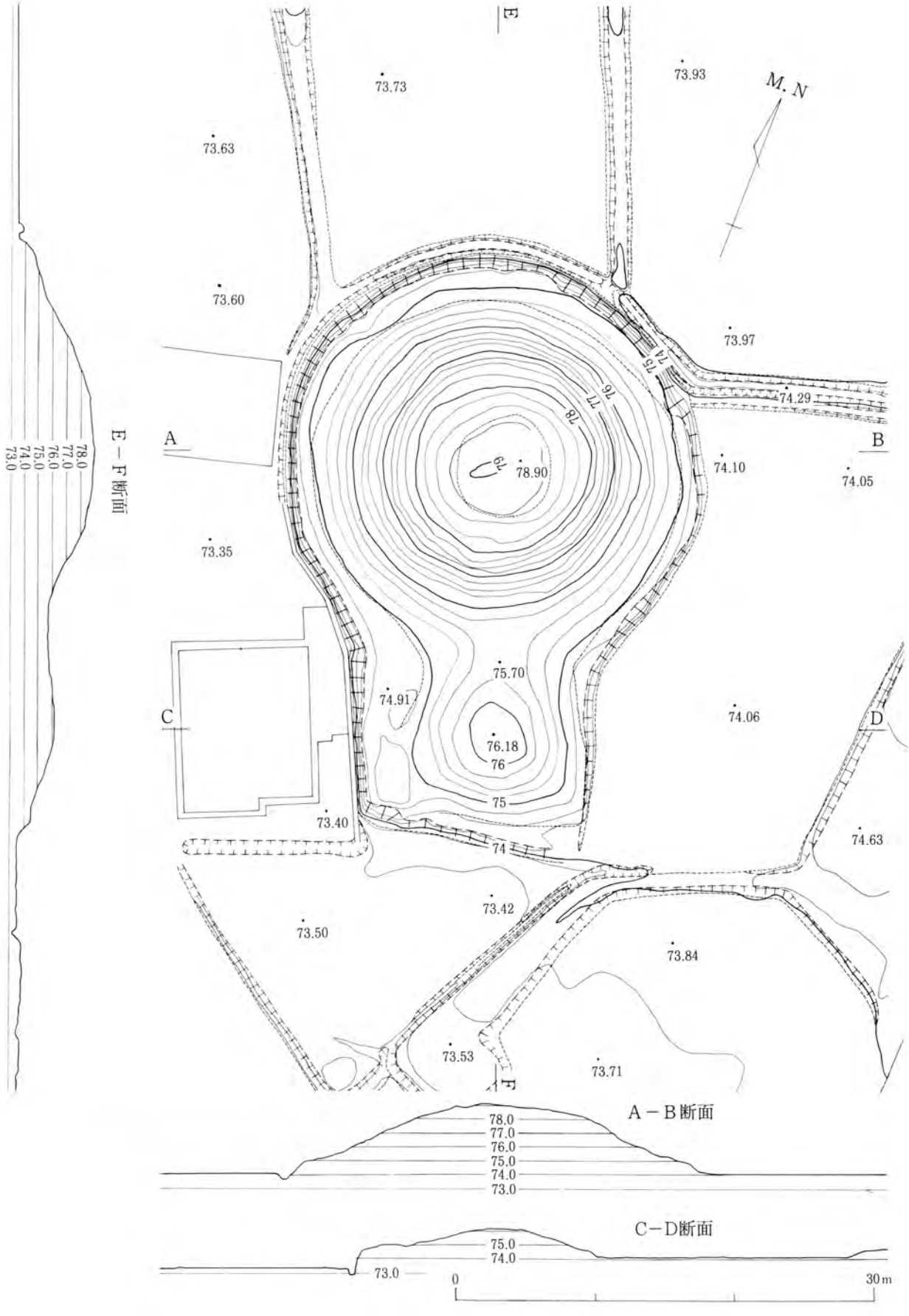
第９図　新田原52号墳墳丘測量図（１：500）



第10図　水神塚古墳墳丘測量図（1：500）



第11図　新田原65号墳墳丘測量図（1：400）



第12図　新田原67号墳墳丘測量図（1：400）

第13図　新田原68号墳墳丘測量図（1：600）

第14図　弥吾郎塚古墳墳丘測量図（1：600）

第15図　大久保塚古墳墳丘測量図（1：600）

第5章　おわりに

今年度の59号墳と百足塚古墳の調査はいずれも調査途中で終了しているため、来年度補足して完全な形で報告したい。

第4章で報告した前方後円墳の測量図報告でも、祇園原古墳群全体では図面のない前方後円墳が残り5基となっているため、今後測量調査を徹底していく。

今年度の調査を通じて認識不足と感じられたのは調査前の計画立案である。緊急調査において記録保存を完備することは勿論のことであるが、整備で今後残していく調査の場合、このような大きい古墳群に着手する際には発掘調査体制や調査のねらいをあらかじめ練り上げておく必要がある。とくに当町のような小さい町であると緊急調査が入った際には現在の調査を中断して保存しておく必要があるし、発掘調査が終了してから整備までに時間が経過する場合の遺構保存も考慮しなければならない。

来年度以降に対する反省課題とし、関係各位のご意見を頂きたい。

写 真 図 版

図版１　祇園原古墳群遠景（一ッ瀬川から台地面を望む）

図版２　祇園原古墳群（弥吾郎塚古墳から古墳群を一望する）

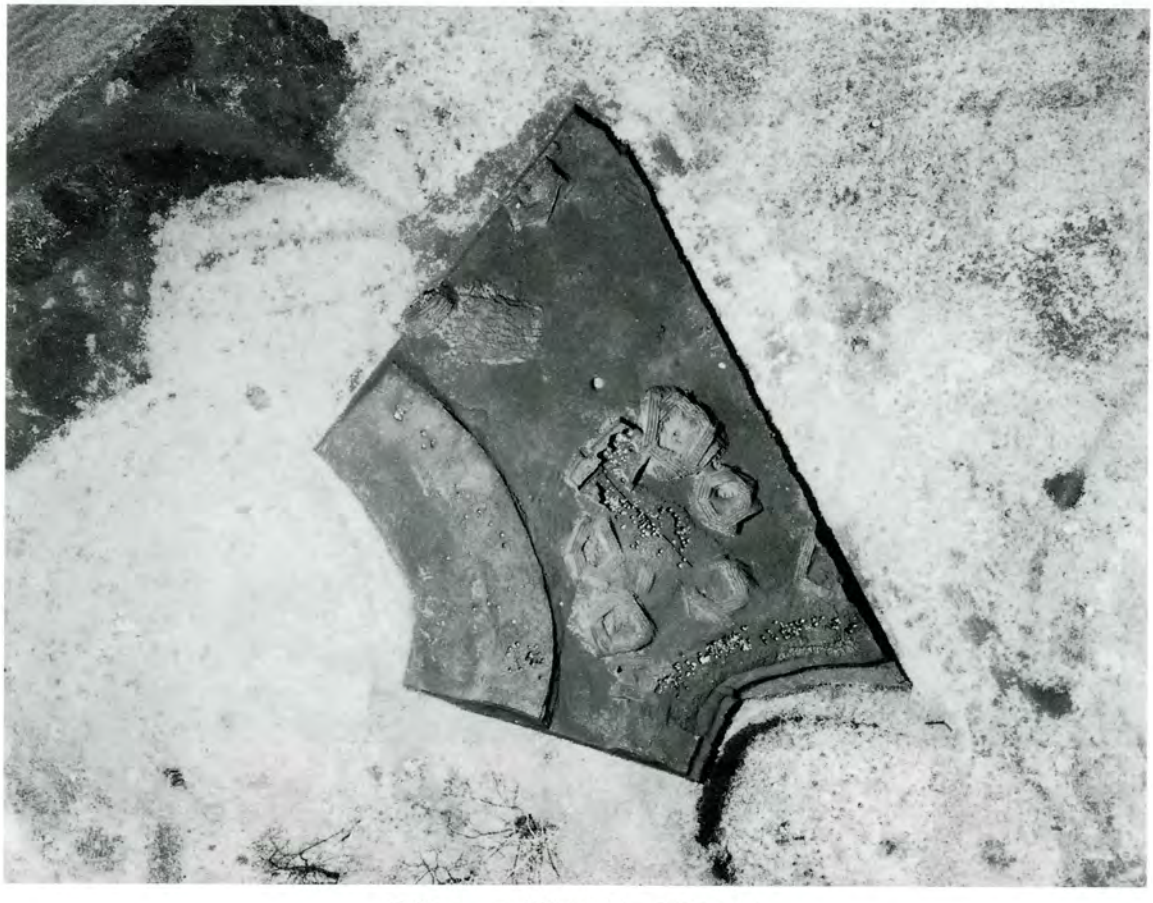
図版 3　祇園原古墳群　平成元年頃

図版４　祇園原古墳群（南から）　平成９年

図版５　百足塚古墳　平成５年

図版 6　百足塚古墳　平成 9 年（調査時）

図版７　百足塚古墳



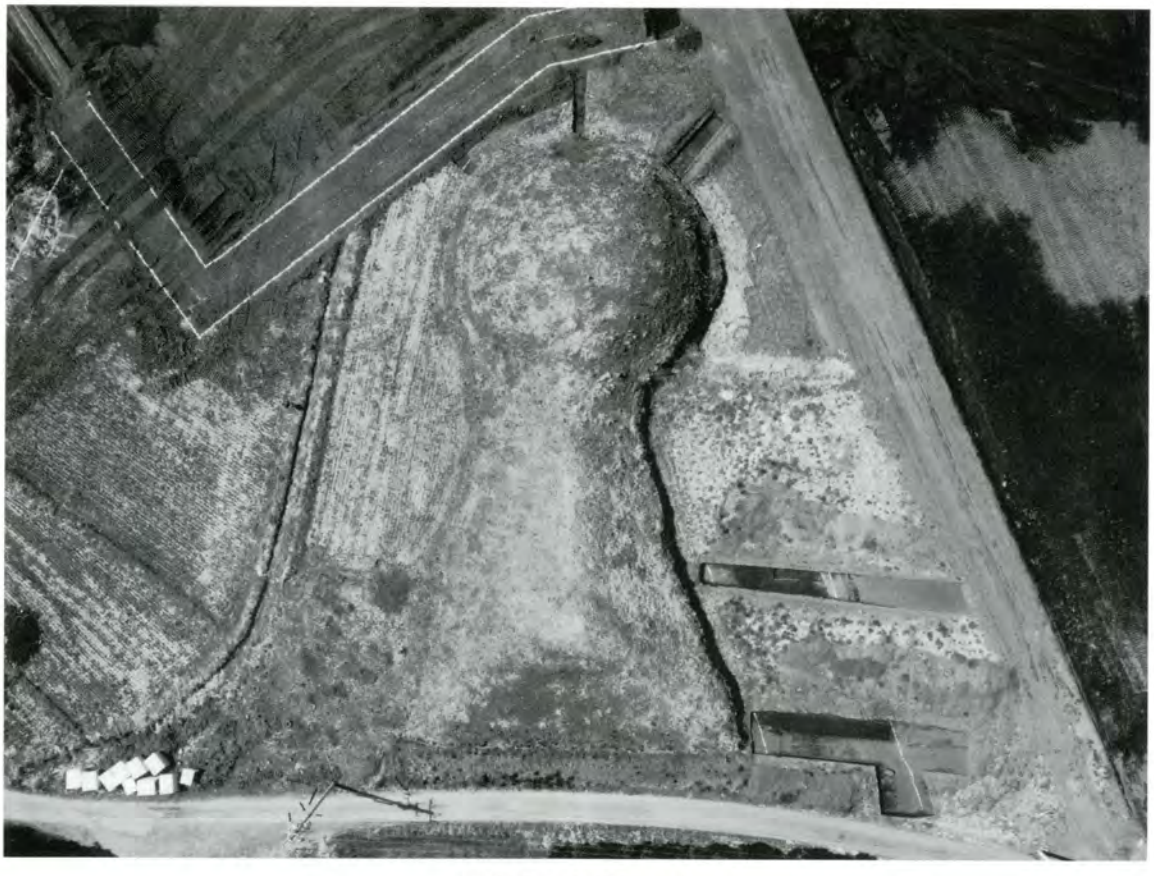
図版８　百足塚古墳　調査Ⅰ区

図版 9　百足塚古墳　調査Ⅲ区

図版10　百足塚出土鹿形埴輪

図版11　百足塚出土人物埴輪

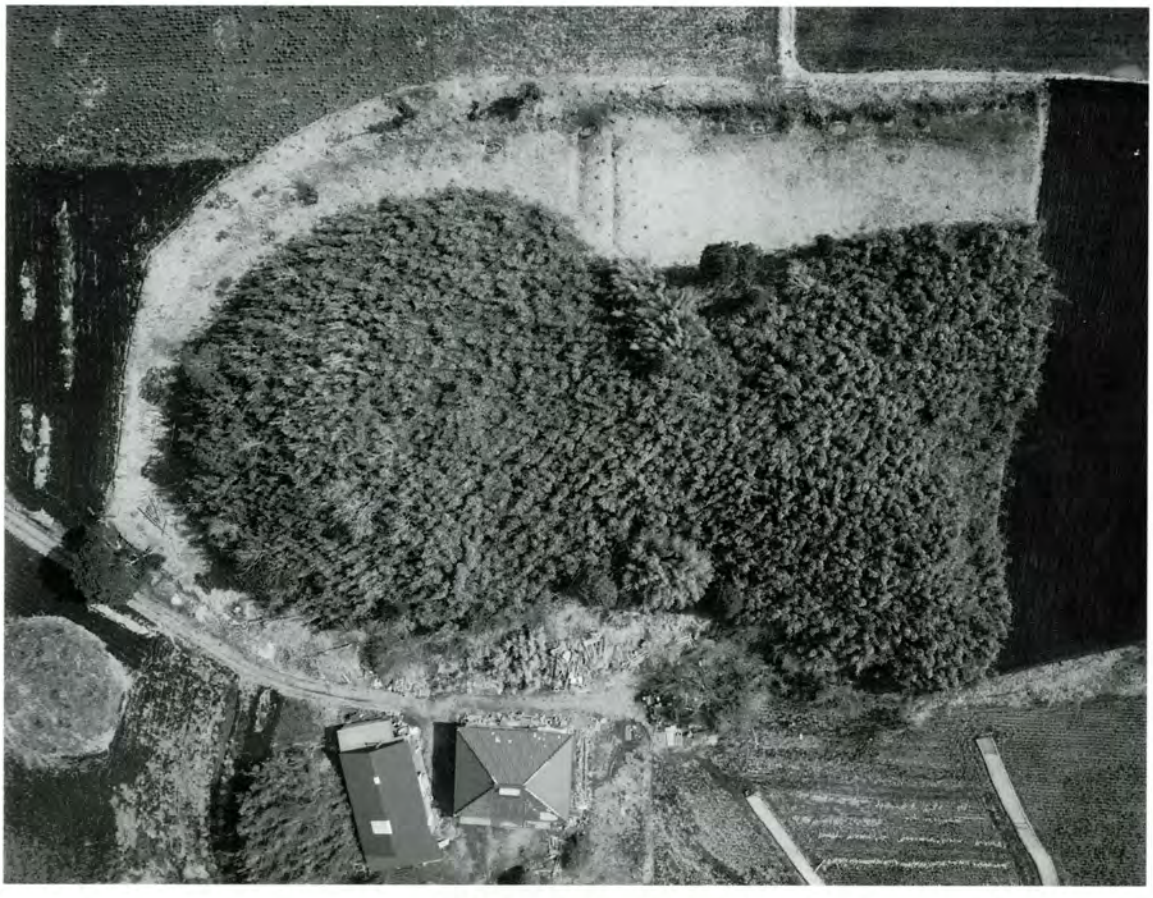
図版12　機織塚古墳



図版13　水神塚古墳

図版14　新田原52号墳

図版15　新田原65号墳



図版16　弥吾郎塚古墳

図版17　大久保塚古墳

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぎおんばるこふんぐんⅠ
書名	祇園原古墳群Ⅰ
副書名	平成９年度国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書
巻次	1
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	有馬義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	１９９８年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
新田原59号墳	新富町大字新田字東俣ほか	47	1001	970714～0831	(測量調査) 7,000㎡	史跡整備
百足塚古墳	新富町大字新田字東俣	47	1001	970931～0931 980108～0331	800㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田原59号墳	古墳	古墳時代	古墳	埴輪（表採）	墳丘約70ｍの前方後円墳
百足塚古墳	古墳	古墳時代	古墳の周溝	土師器・須恵器・埴輪	鹿・人物男根埴輪

新富町文化財調査報告書　第24集

国指定史跡「新田原古墳群」
史跡整備にともなう発掘調査概要報告書

祇園原古墳群Ⅰ

発行年月日　１９９８年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈲印刷センタークロダ